

『文化・階級・卓越化』を読む

—— 社会調査の方法として蘇り、更新されるブルデュー ——

森 田 次 朗
相 澤 真 一

1 はじめに

あなたは『『クラシック音楽が好きな人』ってどんな人』と聞かれた場合、何歳ぐらいの、どのような性別や職業の人の姿をイメージするだろうか。また、「ヘビメタ（ヘビーメタル）が好きな人」や「美術館に頻繁に行く人」、「耳にピアスをあけている人」、「ヨガにはまっている人」の場合だとどうだろうか。

本稿は、こうした様々な「文化」と人々の「社会的背景」（階級・階層をはじめ、性別、年齢、エスニシティ等）の関係について、現代イギリス社会での調査結果をもとに考察した研究であり、筆者たち（森田・相澤）がその翻訳作業¹に関わった『文化・階級・卓越化』（原題：*Culture, Class, Distinction*）の内容を、研究者以外の一般読者や学部生にとって理解しやすくするためのガイドとして執筆するものである。

2009年に執筆された『文化・階級・卓越化』（Bennett et al. 2009=

¹ 本書は5名の研究者による共訳作業の成果であり、青弓社から2017年10月に出版予定である。翻訳メンバーは森田と相澤（中京大学）のほか、磯直樹（日本学術振興会・慶應義塾大学）、香川めい（東京大学）、知念渉（神田外国語大学）である。なお、以下で示す『文化・階級・卓越化』の頁数は、校正原稿上の頁数であり、今後、若干の相違が生じる可能性がある。

2017) は、1979 年に公刊され、現在では社会学の「古典」とも言うべきピエール・ブルデューの『ディスタンクシオン』(Bourdieu 1979=1990) の理論と方法を批判的に継承した大著²である。本書は、質問紙調査とインタビューを組み合わせた「混合研究法」を 2000 年代前半のイギリス社会の分析に応用しており、社会学はもちろん、階層研究や文化研究、メディア研究といった様々な領域の研究者からも、その理論枠組みや方法論の独自性に関心が集っている(森田・相澤 2015; 相澤・森田 2016)。

本稿は、このような『文化・階級・卓越化』(以下、特に断りのない限り「本書」と表記)の概要、とくに本書全体を貫いている社会調査の方法論について解説することにより、社会調査のみならず、広くマーケティングリサーチや統計調査に関心のある一般の方々、さらには社会学以外の人文社会科学を学ぶ大学生にも、本書を手にとってもらうためのガイドとなることを期待して執筆されている。

以下では、『文化・階級・卓越化』を今、なぜ、どのように読むかという本稿の問題意識について、数ある文献のなかでも本書が中心的に依拠しているブルデューの『ディスタンクシオン』が、日本においてどのように受容されてきたかという論点と関連づけながら説明する。

1.1 『ディスタンクシオン』邦訳書の社会的文脈と『文化・階級・卓越化』の方法論的位置

一般的に言って翻訳書は、原書が書かれた時代や社会の状況を踏まえて読まれるべきである。他方で、原書が翻訳される社会の状況にも大きく影響されるため、その「受容」の過程に注目する視点も忘れることはできない。既に筆者の一人である相澤が別稿で詳細に論じているように(Aizawa & Iso 2016)、ブルデューの主著である『ディスタンクシオン』(Bourdieu 1979=1990) が日本社会でいかに受容されたかという経緯は、その訳書が

² 分量は原書(英語)で約 330 頁、訳書で 560 頁に及ぶ。

出版された、1980年代後半から1990年代前半にかけての社会状況と関連づけることで説明することができる。

第一に、ブルデューの受容に影響を与えた社会状況としてあげられるべきは、1980年代後半における「バブル経済」³と「フランス現代思想」の流行である。『ディスタンクシオン』が翻訳された当時は、ブルデューだけでなく、思想や哲学の領域において「フランス現代思想」という名の下に、「構造主義」⁴や「ポスト構造主義」の思想が多く日本に紹介されていた。こうした社会状況のもと、ブルデューの研究もまた、他の多くのフランスの思想や哲学の研究とともに、新しいフランス社会学の「理論研究」、具体的には「再生産論」⁵や「階級論」に関する理論書として紹介されることになった。とくに当時の日本の社会学では理論研究や学説史研究が盛んであり、量的研究と質的研究、理論研究の三者を架橋するような領域横断的な問題意識は社会学者の間で希薄であった。そのため、ブルデューの研究は「フランス現代思想」という問題関心のなかで訳され、理論書として理解されることも多かった⁶。

また、同時に見落とすことができないのが、1980年代以降、ブルデュー

³ ここで唐突な質問になるが、本稿の読者である大学生の皆さんは「バブル（経済、崩壊）」という言葉聞いたことがあるだろうか。バブル崩壊当時に生まれていなかった読者でも、「バブル芸人」の平野ノラの名前を知っている人は多いのではないか（平野ノラ 2017）。衣装は1980年代のバブル時代に流行していた「肩パッド付きスーツ」、髪型は「ロングソバージュ」、メイクは「直線的な太眉と濃いめの口紅」で、1985年に発売されたポータブルタイプの携帯電話、「ショルダーホン」を提げて登場する。

⁴ 「構造主義」とは、狭義には「フランスの人類学者レヴィ・ストロースが1950年代に導入して、60年代以降に一つの思潮となった人文・社会科学の方法論および思想的運動」のこと（『哲学・思想事典』）を指し、広義には「構造を要素と要素の間の関係からなる全体と見、事象をその構造の要素間の関係や変換の結果として捉える方法的な視点」のこと（『社会学小事典』）を意味する。

⁵ 「再生産論」を「階層構造の再生産に教育がどのような役割を果たしているかを論じる」理論的立場と位置づけ、その諸類型の特徴と要点を簡潔にまとめた研究としては小内（1995：6）を参照。

による文化と資本に関する分析が、文化現象と社会的不平等の関係をとらえた実証研究というよりは、ジャン・ボードリヤールの『消費社会の神話と構造』(Baudrillard 1970=1979)の場合と同様に、文化現象間の差異自体とその多様性に注目した「消費社会論」や「記号論」の一つとして捉えられたという点である⁷。例えば、ブルデューが『ディスタンクシオン』という書名で示した distinction という概念(英語でも同表記)をとりあげてみよう。本概念は、辞書において「人と違うこと」、「人よりも良いところ」、「人と区分されるもの」と訳出されているように、『ディスタンクシオン』が出版された1990年代前後の日本社会では、人と人の「差異」を端的に表す概念だと理解されることが多かった。とくに、distinction という概念は、「消費社会」や「一億総中流社会」と呼ばれる時代状況のなか、「ファッションブランド」(洋服、バッグ、アクセサリー等)を中心とした狭義の「消費」の場面における人と人との差異や、その「戯れ」を記述するための概念として理解されがちであった。しかし、ブルデューによる本来の用語法としては、ある人の服装や振舞いが他者と「異なっている」(差異化する)という単なる事実関係を意味するだけでなく、『文化・階級・卓越化』のタイトルに「卓越化」という訳語があてられていることから

⁶ こうしたブルデューの受容のされ方は、他の「思想家」たちにも該当する。たとえば、冷戦体制の崩壊時に「ポストマルクス」の思想家として人気のあったルイ・アルチュセール(1918年-1990年)や当時、教育社会学の分野で世界的に重要な位置を占めていたリーディングス『教育と社会変動』で注目を集めたサミュエル・ボールズ(1939年-)とハーバード・ギンティス(1940年-)、あるいは階級と言語の関係に焦点を当てた限定コード／精密コード論で有名なバジル・バーンステイン(1924年-2000年)と共に「再生産」の理論家と見なされることも少なくなかった。

⁷ こうした時代の「空気」を象徴的に捉えた書籍で、社会学者にもしばしば引用されるものとしては『金塊巻』があげられる(渡辺1984; 秋永1992: 146)。

⁸ また、後述するように、ブルデューの理論の代表的な概念である「文化資本」や「ハビトゥス」は、このような文脈で受容された概念の例として挙げられるかもしれない。

わかるように、本来は、その「違い」に対する意味づけや社会的評価（優劣）のあり方を批判的に考察するための概念である⁸。そのため、自己と他者との違いに関する優劣を含意する「卓越化」ではなく、「差異化」という観点から distinction という概念が解釈された結果、『ディスタンクシオン』に掲載されている文化現象の多様性（文学、美術・芸術、映画、音楽、スポーツ、政治行動、住居、食事等）⁹と同時に、そうした多様な文化現象がいかに社会的不平等と関連しあうのかという関係論的な視点が、それぞれ看過されることになったと考えられる。

第二に、日本におけるブルデュー受容のされ方に影響を与えたのは、社会調査をめぐる日本のアカデミズムのあり方である。1997年にSSJデータアーカイブが東京大学社会科学研究所に設置され、2000年にJGSS（日本版総合的社会調査）が実施されるようになる。こうした状況を受け、社会学の量的調査データが研究者の間で共有の財産として意識され始め、さまざまな二次分析が試みられるようになるまで、量的研究は日本の社会学のある一分野を成すものでしかなかった。とくに、日本を代表する大規模社会調査として、1955年から10年に一度行われてきた「社会階層と社会移動調査（SSM調査）」ですら、東京大学や大阪大学に代表される特定の大学に所属する研究者を除けば、接点のある人は限られていた。つまり、日本の社会学者の問題関心において、ブルデューの理論研究と量的／質的調査を架橋する研究を受け入れる素地が十分にあったとは言い難い面があった。

このように、ブルデューの研究、とくに『ディスタンクシオン』は、当時の社会あるいはアカデミックな文脈に強く影響を受けて、理論研究あるいは思想研究の一部として限定的に理解され、受容されがちであったと説明できるだろう。

⁹ たとえば、『ディスタンクシオン』の訳書、第一巻巻末（Bourdieu 1979=1990: 481-488）にある「《調査票》」を参照。

しかし、こうしたブルデュー理解に対して、本稿が何よりも強調したいのは、ブルデューとは社会調査の実践者であり、現在の言葉を用いて言いかねば『ディスタンクシオン』は量的調査（アンケート調査）と質的調査（インタビュー調査）の両方を用いた「混合研究法」（mixed method）の先駆者だという側面である。『ディスタンクシオン』はその目次を見ればわかるように、社会調査の分析及び考察を行った書籍である¹⁰。『ディスタンクシオン』を社会調査の書として読むためには、「理論書」や「思想書」という限定されたイメージを一旦排する必要がある、そうした視点こそが『ディスタンクシオン』の「イギリス版」とも言うべき『文化・階級・卓越化』を読むうえでも必要不可欠だと考えられる。

そこで本稿では、以上の問題関心のもと、ブルデューの著作における社会調査の理論や方法のポテンシャルを最大限引き出すために、『文化・階級・卓越化』の主要な方法や分析枠組みを解題することを目的とし、以下論じていくことにする¹¹。

『文化・階級・卓越化』は、ある面で大変読みやすく、ある面で大変読みにくい書籍である。例えば、第4章から第9章では、映画（『マトリックス』）やファッション（ピアスやタトゥー、美容整形）、音楽（クラシック音楽からイギリスのロックバンドの Oasis まで）、文学（『ハリーポッター

¹⁰ フランス文学が専門の石井洋二郎氏による『ディスタンクシオン』の翻訳は、きわめて詳細な解説（訳注）とともにフランス社会の質的情報（芸術、食、住居、ファッション、職業等）について流麗に訳された一方で、統計用語などの量的調査上の方法論を実際に活用していく点では、ブルデュー理論の意義を十分に汲み取りきれない部分もあったのではないかと考えられる。

¹¹ もちろん、この『ディスタンクシオン』の翻訳出版から二十数年を経て、翻訳される『文化・階級・卓越化』の原書は英語で書かれており、欧文の文献に精通している研究者、大学院生などの専門家にとってはあえて訳される必要がなかった書籍かもしれない。また、翻訳を担当した筆者たちとしては、訳出の困難さと限界にしばしば直面しており、その点の未熟さを露呈している部分もあろう。それでもあえて、本書をこのようにして紹介するのは、ブルデューから発展する社会調査の方法と可能性が人口に膾炙することを願っているからである。

と秘密の部屋』など)、スポーツ(サッカーからヨガまで)、美術(ルネサンス、バロック、印象派から前衛芸術まで)、食事(健康食材として注目されているキヌア)など無数の「文化」(固有名詞)が登場する。同時に、数多くのインタビューの語り(たとえば、世帯インタビューでは30世帯、40名が回答)が引用されているため、社会学の理論や統計用語に関する専門的知識がない者でも、興味に応じて途中から読むことができるだろう。

その一方で、本書の「はじめに」あるいは第1章から通読しようとする
と挫折してしまう難所が複数みられる。例えば、第1章と第2章では、先行研究からの知見を豊富に引用することで、本書の方法論上の独自性について詳細に検討されており、続く第3章では、日本では比較的なじみの薄い「多重対応分析」の手法と、それをういて作成されたイギリス社会における「文化マップ」(様々な文化の活動や好みの配置図)が提示されている。とりわけ、第2章の「社会的なものの関係論的組織化」(relational organization of the social)という考え方は、日本の社会調査の授業や教科書で取り上げられるオーソドックスな説明とは異なっているため、初学者には混乱を招く恐れがある。

そこで、本稿はこのような魅力と難解さを併せもつ『文化・階級・卓越化』の要点、とくにその全体を貫く社会調査の方法論を解説することにより、本書を手にとる機会を広げていくためのガイドとして活用されることを期待して執筆されている。そのため、以下の説明では、社会学理論としてはかなり入門的な説明を多数含んでおり、読者の理解を助けるために議論を単純化した箇所があることをあらかじめ断っておく¹²。

¹² 社会学理論の専門家にとっては、眉をひそめなくなるほどの単純化も含まれているかもしれない。その点をご寛恕の上、読まれたい。

1.2 『文化・階級・卓越化』の著者と構成

『文化・階級・卓越化』の解説に入る前に、本書の著者と構成について概説しておきたい。『文化・階級・卓越化』は、ラウトレッジ社より2009年に出版された著作（共著）であり、著者たちはイギリスを中心に活躍する6名の研究者（トニー・ベネット、マイク・サヴィジ、エリザベス・シルヴァ、アラン・ワード、モデスト・ガヨ・＝カル、デイヴィッド・ライト）である。彼・彼女らはCRESC(Centre for Research on Socio-Cultural Change) という研究グループを主導しており、その中でも代表的な役割を担っているのが、ベネットとサヴィジの2名である（CRESC 2017）。本書の著者や概要については、すでに別稿で論じているため（森田・相澤 2015）、ここでは最低限の説明にとどめておく。

ベネットは現在ウェスタンシドニー大学の教授とメルボルン大学人文学部プロフェッショナル・フェローを兼務している研究者であり、文化研究と文化社会学が専門である。ベネットの研究についてはすでに邦訳が出ており、単著としては『フォルマリズムとマルクシズム』（未来社）が、共編書としては『新キーワード辞典』（ミネルヴァ書房）が出版されている。これに対して、サヴィジはロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）の社会学部教授と国際不平等研究センターの共同所長を兼任している研究者であり、19世紀から20世紀にかけての階級の歴史や政治、都市に関する研究で有名である。とくに、近年の彼の関心は社会学的な階級分析にあり、2011年以降は、BBCと共同で実施した英国階級調査(GBCS)の成果を分析し、注目を集めている（Savage 2015）。

次に、『文化・階級・卓越化』の主な特徴を述べると、本書はブルデューの『ディスタンクシオン』の問題設定、理論、及び方法をそれぞれ批判的に継承し、イギリス社会の分析に応用している点にある。後述するように、本書はブルデューと同様、「関係論的視点」を採用しており、計量分析では「多重対応分析」(Multiple Correspondence Analysis、本書内ではしばしばMCAと表記)を用いている。

しかし、本書と『ディスタンクシオン』とはいくつかの点で大きく異なっている。詳細は、訳者による本書巻末の「解説」（磯・相澤）にゆずるとして、社会調査法という観点からブルデュー研究に注目するという本稿の問題関心上、両者の違いとして以下の3点を指摘したい。

第一の相違点は、イギリス社会における2000年代以降の動向、つまり新自由主義的な思潮の拡大と移民人口の増加というマクロな社会変動の影響を、研究上の出発点としている点である（研究背景の側面）。とくに、本書では『ディスタンクシオン』が「『自律的』で『抽象的』な文化という近代主義の考え方」に依拠しているという問題関心のもと、こうした「近代主義」と呼ぶべき考え方が、「商業化された消費主義的な新自由主義の時代」においては「時代遅れ」になっていると評価されている（本書48頁）。第二の相違点は、ジェンダー（ゲイ／レズビアンを含む）やエスニシティ（インド系、パキスタン系、アフロ・カリブ系）といった『ディスタンクシオン』ではほとんど扱われていない「社会的マイノリティ」を研究の射程に入れている点である。その結果、『ディスタンクシオン』と、本書の調査票の内容は大幅に異なっている（研究対象／方法の側面）。第三の相違点は、文化に関する好みや行動の多様性、すなわち「文化的オムニボア」（雑食性）をめぐる議論を踏まえ、「文化資本」に代表される主要な概念を再定義している点である（理論枠組みの側面）。とくに、イギリスにおける文化現象の対立を、大学教授や大企業の管理職といった「上流階級」（高級文化）と、事務労働者や小学校教員、単純労働者といった「中間階級／庶民階級」（大衆文化）の対立ではなく、「文化的に活発であり幅広い活動に関与しているようにみえる人々」と「狭い範囲の文化的活動や関心しかもたない相対的に無関心な人々」の対立として説明している点である（本書90頁）。

このように独創的な視点にたつ本書の目次は、以下の通りである。本書は、目次と序論、結論、方法論補遺を除くと大きく4つのパートから構成されている。

目次

序論

第1部 分析の位置付け

第1章 『ディスタンクシオン』以後の文化

第2章 文化資本の調査に向けて

——理論と方法に関するいくつかの問い

第2部 嗜好・実践・個人のマッピング

第3章 イギリスの文化的趣味と関与のマッピング

第4章 文化マップのなかの諸個人

第3部 文化界と文化資本の構成

第5章 音楽界の緊張関係

第6章 人気と稀有と——読むことの界に関する探究

第7章 視覚芸術の社会的キャンパス

第8章 卓越化の対照的なダイナミクス——メディア領域

第9章 文化資本と身体

第4部 卓越化の社会的次元

第10章 中産階級の文化形成

第11章 文化と労働者階級

第12章 ジェンダーと文化資本

第13章 ネイション、エスニシティ、グローバル化

結論

方法論補遺

以上のような『文化・階級・卓越化』の内容について、以下ではおもに理論的枠組みを説明した第1部の議論から1章（本稿2節）と2章（同3節）を取り上げるとともに、方法論について説明した第2部から3章と4章（同4節）を中心に取りあげ解題していく。第1部と第2部に限定して議論を進める理由は、これら4章における社会調査や分析の考え方がわか

れば、具体例の多い他章については個人の興味関心に応じて読み進めることが容易だと考えられるからである。

2 ブルデューの『ディスタンクシオン』の問題設定とその批判的継承

本節では、『文化・階級・卓越化』の「1章『ディスタンクシオン』以降の文化」の論点をまとめる。

2.1 「ブルデュー」とは誰か——『ディスタンクシオン』の問題設定

最初に、ピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu、1930年－2002年）の経歴について述べる¹³。ブルデューはフランスを代表する社会学者の一人であり、その著作の多くが日本語で翻訳されている。

訳書のうち代表的なものとしては、初期のアルジェリア社会におけるフィールドワークの成果である『資本主義のハビトゥス——アルジェリアの矛盾』（Bourdieu 1977=1993）があげられる。また、美術や文芸などの具体的な分析を行った著作としては『美術愛好』（Bourdieu et Alain 1966=1994）や『芸術の規則』（Bourdieu 1992=1995, 1996）がある。これら実際の社会現象を中心的に分析した研究に対して、彼独自の理論を体系的にまとめた著作としては『実践感覚』（Bourdieu 1980=1988, 1990）があげられるものの、アメリカで活動する社会学者ロイック・ヴァカンとの知的対話を交えた『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』（Bourdieu & Wacquant 1992=2007）がブルデュー理論の入門書としてはお勧めである。

また、上述の『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』以外にも、他の

¹³ ブルデューの経歴についてはGrenfell(2012)を、『ディスタンクシオン』の概要については、『社会学文献事典』より『ディスタンクシオン』の項目（石井洋二郎氏による訳者要約）を参照した。下記の各文献の書誌情報は、本稿文末の「文献」を参照。

研究者との共著も多く、フランスの社会学者であるジャン＝クロード・パスロンとの『遺産相続者たち——学生と文化』(Bourdieu et Passeron 1964=1997) や、『再生産——教育・社会・文化』(Bourdieu et Passeron 1970=1991) は、一見「公平」とされる学校教育が、いかに社会の不平等の形成に寄与しているかについて実証的に分析したものである。これらの多くの著作のなかでも本書がとくにその知見を継承しているのが、『ディスタンクシオン——社会的判断力批判』である。

では、その『ディスタンクシオン』とはどんな研究か。『文化・階級・卓越化』の内容に即して説明する¹⁴。まず、『ディスタンクシオン』の意義を筆者なりに大雑把にまとめるならば、それは「文化」というものが、社会的な条件のもとで形成されていること、とくに「文化的な価値観(嗜好)が社会的に構築されたもの」だということを経験的なデータにより明らかにしている点にあると考える。すなわち、本書においても以下のように書かれている点が重要である(本書 28 頁)。

文化的諸形態とは優れていて偉大なものであり、さらには普遍的で時代を超えて存在するものだという主張を額面どおりに受け取ってはならず、こうした主張は、文化的諸形態を高く評価する者たちが、それら諸形態に対してどのような社会的な価値を付与していて、そうして付与された価値がどれだけ必要とされているかということに、どれほど密接に結び付いているのかを提示するためにこそ分析されるべきものなのだ。

『ディスタンクシオン』では、「趣味判断」という一見したところきわ

¹⁴ 本稿は学部生をはじめとする一般の読者を対象としているため、ブルデューの学説史に関心のある読者は本書に直接あたることをお勧めする。本書の第1章では、フランスにおける論争、イギリスにおける社会階層論、アメリカにおける文化社会学、文化研究及びメディア研究という4つの観点から整理がなされている。

めて個人の自由や判断に依拠していると考えられる価値の領域において、いかに既存の階級構造（訳書でいうところの上流階級／中間階級／庶民階級）と社会的不平等が関係しているかを調査のデータにもとづき明らかにしている。『ディスタンクシオン』は、序文、第Ⅰ部（第1章）、第Ⅱ部（2章から4章）、第Ⅲ部（第5章から第8章）、及び結論と追記からなる。

そのなかでも『文化・階級・卓越化』を読む上で重要なのは、「第Ⅱ部 慣習行動のエコノミー」において提示される「社会空間」の構図である。ここでは、社会を一種の座標平面にとらえ、「経済資本」と「文化資本」（後述）という二つの概念の多少を数値化し、縦軸に「資本総量」（上に行くほど2種類の資本の合計が大きい）、横軸に「資本構造」（右にいくほど「経済資本」が優位、左にいくほど「文化資本」が優位）をとることで、さまざまな職業カテゴリーがどのように位置づけられるかを分析している。たとえば、大企業の経営者は資本総量が大きく、経済資本が優位を占めるため、空間の上方右寄りに位置するのに対して、小学校教員は資本総量が中位で文化資本が優位であるため、社会空間の中ほど左寄りに位置する。

本書の第1章では、こうした『ディスタンクシオン』の問題設定と調査法を叩き台としながら、以下のような3つの問い（「公理」）が提示される。第一の問いは、「現代のイギリスに文化資本を見いだすことが可能か、もしそうである場合、それはどのような形態をとるかを判断すること」である（本書32頁）。第二の問いは、「音楽、読書、芸術、テレビ、映画鑑賞、スポーツなどの様々な文化の界が似たような原理によって構造化されているのではないか、さらにもしそうであるとすれば、そのような類似性の本質とは何か、ということ」である（本書33頁）。第三の問いは、「地位を確立した中産階級諸集団が文化形態の組織化によって優位になる過程をどの程度までとられることができるか、また、同様の過程がもろもろのジェンダーとエスニック集団の関係の秩序化と再生産においてもみられるか、ということ」である（本書34頁）。

2.2 ブルデューのキーワード解説——文化資本／界／ハビトゥス

『文化・階級・卓越化』の要点を理解するにあたり重要なのは、「文化資本」、「界」、「ハビトゥス」という三つのキーワードである。この三つのキーワードは、先の段落で確認した本書の三つの「問い」と密接に関連しあっている。そのため、ここでは、これらキーワードの辞書的な意味を確認しながら、本書が何を明らかにしたいかという問いの内容について具体的に解説していく。

第一のキーワードは、「文化資本」(cultural capital)である。この文化資本という用語は、K・マルクス以来の系譜を組む貨幣的価値を持った経済的な資本、とくに『資本論』及び『経済学・哲学草稿』での議論のもとに考案された概念である。すなわち、ある人物が社会的な「位置」を占める際（例えば入学する、就職するなど）に、その人自身、あるいはその人の行為の価値は「経済資本」（貨幣量）の多少によって測定されうる。ブルデューは、このような「経済資本」の概念から着想を得つつ、経済資本とは別次元の構成要素や力学を持つ資本として「文化資本」を提示している。本書での説明を借りれば、文化資本とは「どちらかと言えば、資産のようなはたらきをする」ものであり、「文化資本をもつ者は、それを持たない者からの支出を得る」というわけである（以上、本書 30 頁）。つまり重要なのは、1)「文化」もまた「貨幣」と同様に数量化できること、2) 文化を「元手」（資本）とすることで、別の文化資本や経済資本に転換できるということである。

ただし、文化資本の概念について注意が必要なのは、本概念が上流階級や中間階級（中産階級）といった階級上位層と密接に関連づけられて定義されている点である。たとえば、ブルデューは文化資本とは何かについて、以下のような意味合いをもつ「美的性向」(aesthetic disposition) と関連づけながら説明している (Bourdieu 1979: 57 (1984: 55) = 1990: 85)。

日常の差し迫った必要を和らげ、実践的な目的を括弧に入れる一般

化された能力、あるいは実践的な機能をもたない実践に向かう持続的な傾向と適性のこと。これらは差し迫った必要から解放された世界での経験のなかでしか、また、それ自体が目的であるような諸活動、例えば学校での練習問題や芸術作品の鑑賞といった実践なくしては構成されえないものである（本書 31 頁）。

このように、文化資本とは、ブルデューが「必要性の文化」と呼ぶ労働者階級に特徴的な文化とは対照的であり、それが「身体化され、教養がある中産階級は身体と知の両面で社会化されて、『正統』文化を享受できる」と説明されている。（本書 30 頁）。例えば、文化的に「優れており」、「望ましい」ものとして評価される能力（例えば、ピアノを弾けたり、上手に絵が描けたりすること）を身につけている者は、その活動することによって金銭的に収入を得たり、社会的に評価されたりすることがある。一方で、ピアノ講師や画家が必ずしも高所得者でないことを考えてみれば、この文化資本が経済資本と関連しながらも、別の次元で存在していることが理解しやすくなるのではなかろうか。もちろん、このような特定の階級と関連づけられている文化資本は、すべての社会に自明のものとして存在している訳ではない。だからこそ、先述の第一の問い（「現代のイギリスに文化資本を見いだすことが可能か、もしそうである場合、それはどのような形態をとるかを判断すること」）で確認したように、本書における問題関心は、文化資本がブルデューの観察した 1960 年代のフランス社会と同様の形態でイギリス社会においても観察することができるのか、という問いからスタートしているわけである。

第二のキーワードは、「界」である。「界」という単語は、フランス語では Champ、英語では、field であるため、「場」とも訳されることも多い。この概念は、本書の第二の問い（「音楽、読書、芸術、テレビ、映画鑑賞、スポーツなどの様々な文化の界が似たような原理によって構造化されているのではないか、さらにもしそうであるとすれば、そのような類似性の本

質とは何か、ということ」)の中心となっている。

先ほどのピアノや絵画の例からも想像できるように、私たちの身の回りに目を向けてみると、ピアノが弾けることや絵画をうまく描けることが肯定的に評価される「界」と、さほど評価されない「界」があること、あるいは、こうした能力に対して独特の評価を行う「界」があることがすぐわかるだろう。例えば、合唱コンクールを恒例行事として毎年、大々的に実施している中学校のクラスのほうが、そうでない中学校のクラスよりも、ピアノの演奏をできることは相対的に高く評価されるだろう。また、音楽大学や芸術大学の学生たちのようなピアノや絵画を専門的に勉強している人達の間では、その優劣がよりシビアに評価されることになる。したがって、このようなそれぞれの文化資本を持った人が位置する空間、すなわち、「界」とそこにおいて評価される行為や価値観の全体像をそれぞれ示してみると、各界の間に共通点が発見できるのではないか、というのが第二の問いの骨子である。このように、文化資本が意味を持つためには、ある一定の「界」の存在が前提となっているという点がポイントである。

第三のキーワードは、「ハビトゥス」である。ハビトゥスは、フランス語で *habitus* と綴るように、英語の *habit* とも通じる単語である。*habit* という単語が、例えば、『ランダムハウス英和大辞典』によると、「癖」、「習慣」、「習わし」、「性癖」、「傾向」といった意味が掲載されていることからわかるように、人は一見、個々に個別的で独立したように見えても、ある種の社会的な環境に影響されながら行動している。例えば、お辞儀をしよう日本の慣習に親しんだ人々が、初対面でもまず握手をしたり、親しい場合には、挨拶の一貫として同性同士でハグやキスをしあったりする人々を見ると、驚くことが多いであろう。ブルデューの『ディスタンクシオン』では、その書籍名が「*distinction*」(卓越化、区別すること)とされていることに象徴されるように、同じ言語や文化を共有する社会(『ディスタンクシオン』ではフランス社会、『文化・階級・卓越化』ではイギリス社会)であっても、異なったハビトゥスを持った人々(集団)が観察される

ことに注目がなされている。

ただし、こうしたハビトゥスの概念をどう応用するかについては、ブルデューの『ディスタンクシオン』と『文化・階級・卓越化』ではいくつかの点で異なっている。ブルデューは、『ディスタンクシオン』において「ハビトゥス」を定義しており、『文化・階級・卓越化』においても引用されている箇所から説明してみよう（Bourdieu 1979: 193 （1984: 173） = 1990: 265）。

ハビトゥスの総合的な統一性、あらゆる実践を統一し生成する原理のうちに体系的な統一性が存在するからこそ、家屋、家具、絵画、書籍、自動車、アルコール、タバコ、香水、衣服といった個人や集団を取り巻くすべての特性——そして物——のうちに、また、スポーツ、ゲーム、エンターテインメントといった彼らが自らの卓越性を顕示しようとする実践のうちに体系的な統一性が見いだされるのである（本書 60-61 頁）。

すなわち、この引用部においてブルデューは、「ハビトゥス」には体系的な統一性があることを強調している。同時に見落とすことができないのが、その統一性が特定の階級と結びついているとされている点である。たとえば、本書では、下記のような『ディスタンクシオン』からの引用がある（Bourdieu 1979: 59 （1984: 56） = 1990: 88）。

それ（ハビトゥス：筆者注）は存在条件のある特定の階級＝集合に結び付いた条件づけから生まれるものであり、同じような条件に生まれた人々すべてを結び付けると同時に、これらの人々を他のすべての人々から区別する。それも彼らの最も本質的なやり方で区別するのである。というのも嗜好というのは、人間であれ物であれ、存在するものが有するすべての基盤であり、また、人が他人にとってどういう存

在か、そして人は何によって自らを分類し何によって分類されるのか、といったすべてのことの基盤だからだ(本書 60 頁、以下ブルデューの原書から引用された訳文は、『文化・階級・卓越化』の訳者による)。

このようにハビトゥスとは、「ある特定の階級＝集合に結び付いた条件づけから生まれるもの」であり、ブルデュー自身の別の言葉を借りれば「構造化する構造」であると同時に、「構造化された構造」(Bourdieu 1979: 191 (1984: 170) = 1990: 263) として定義されている。その一方で、グローバル化の中で従来の社会階級がより不可視になり、エスニシティやジェンダーによる区分が流動化している、2000 年代イギリス社会を調査対象とした『文化・階級・卓越化』では、このハビトゥス自体がそれぞれの階級と統一性を持ってアプリオリに定義すること、すなわち、調査前から所与として捉えることが難しくなっている。そのため、「どのような社会集団がどのようなハビトゥスを持っているか」という問いのみならず、「どういうハビトゥスをもった人々がどういう社会集団を構成しているのか」というように、発想を逆転することが喫緊の課題となった。

こうした状況を受けて本書では、第三の問い(「地位を確立した中産階級諸集団が文化形態の組織化によって優位になる過程をどの程度まで捉えることができるか、また、同様の過程がもろもろのジェンダーとエスニック集団の関係の秩序化と再生産においてもみられるか」)のように、地位の確立した階級集団と組織化された文化形態の関係が、どこまでそもそも観察されうるのか、また、それがジェンダーやエスニシティの観点からどう捉えなおせるのかが本書全体を貫く問いとして掲げられている。

3 ブルデューによる社会調査法の刷新と『文化・階級・卓越化』における改良点

第2節までに紹介した『文化・階級・卓越化』の第1章の問いを要約すると、文化資本／界／ハビトゥスといった概念を用いて、2000 年代のイ

ギリス社会における「文化と階級」の問題を読み解くことができるのか、ということに尽きる。では、これらの概念は実際に、どのようにすれば、社会調査の手段として活用していくことができるのだろうか。この点が書かれているのが、『文化・階級・卓越化』の「2章 文化資本の調査に向けて——理論と方法に関するいくつかの問い」である。本節では、通常社会調査の方法とは異なる「関係論的組織化」の考え方と、『文化・階級・卓越化』で『ディスタンクシオン』の反省を踏まえた調査法、とりわけサンプリングにおける改良点について紹介する。

3.1 社会調査における因果関係の捉え方とその転換——「関係論的組織化」をめぐる

「関係論的組織化」(relational organization) という考え方を取り上げるにあたり、まず強調しておきたいのは、ブルデューの『ディスタンクシオン』、および本書で採用されている社会調査の考え方が、いわゆる日本の社会調査の入門授業で紹介される関係性の捉え方とは異なる点である。ここを踏まえることが、本書とブルデューの『ディスタンクシオン』を「社会調査の書」として読み解く際の重要なポイントとなる。

例えば、現在でもしばしば社会調査の教科書として用いられる高根正昭の『創造の方法学』では、「アメリカの社会科学が共通に持っている、問題解決のための論理」として、「『原因』と『結果』とを明瞭に定めて、問題の論理を組み立てる方法」を詳細に説明している（高根 1979：35）。つまり、ここで強調されているのは、社会学においては「原因」と「結果」からなる関係、すなわち因果関係がその方法論上の大前提だという考え方である。高根はさらに因果関係に基づく「『説明』の方が、『記述』より是一段と高度な研究で、およそ社会学者たるもの『説明』を行うよう、努力しなければならない」（高根 1979：39）という考え方を、カリフォルニア大学バークレー校の社会学部の学風と合わせながら説明している。

このように通常社会科学の入門授業では、社会科学における調査で目

指すべきは、単なる単純集計ではなく、原因を示す独立変数と結果を示す従属変数（結果変数）の間に結びついた因果関係の説明であり、このような関係性を持って社会を捉えようとするということが社会調査の理解の基礎だとされているのだ。だが、ブルデューの『ディスタンクシオン』とその応用としての本書の調査法を考えた際、この発想を一旦、脇に置いて別の発想に注目する必要がある。ブルデューは、「従属変数と独立変数もしくは原因変数を区別して『社会的なもの』を定義するのではなく、平面上に配置された実践の關係に焦点を当てることで『社会的なもの』を捉えよう」とする姿勢を持っていた（本書 70 頁）。この考え方は、『ディスタンクシオン』（Bourdieu 1979: 114-115 （1984: 103）=1990: 162）にも次のように示されている。

ある従属変数（例えば政治上の意見）と性別、年齢、宗教、さらに教育水準、収入、職業などのいわゆる独立変数との個別的な關係は、こうした個々の相関關係のうちにしるされた様々な効果がもつ独自な力と形の、真の原理を構成する諸關係の完全な体系を隠蔽してしまう傾向がある。だから「独立」変数のうちでも最も獨立性の強いものは、その変数がある意見なり行動との間に取り結んでいるなかにひそむ統計的諸關係の網を、すっかり隠蔽してしまうだろう（本書 71 頁）。

すなわち、ブルデューは、原因を自明視する従来の社会学のモデリングではなく、諸關係が網の目のように構成されているその網全体を捉えることを企図したのである。本書では、シカゴ大学の社会学者、アンドリュー・アボットが指摘したように、「ごちゃごちゃした複雑な世の中では、「従属」変数と「原因」変数を区別すること」の困難さも紹介されている。ここから本書では、英語圏で行われてきた『ディスタンクシオン』に関する研究とは異なり、ブルデューが用いていた「多重対応分析に立ち戻ること」が提唱されている（本書 71 頁）。「多重対応分析」を導入することの利点は、

続く第4節での議論を先取りするならば、従来の社会科学的な社会調査における因果関係を捉える方法としての社会調査ではなく、社会の関係性全体を描き出そうとするとともに、ここに『文化・階級・卓越化』と『ディスタンクシオン』の社会調査の方法論上のきわめて大きな特徴がある。そして、このように特定の変数間の因果関係を明らかにする方法ではなく、複数の変数間の関係性全体を捉える手法こそが、本書の第2章で説明されている「社会的なものの関係論的組織化」（本書71頁）という視点である。

以上の議論に関連して『文化・階級・卓越化』では、ブルデューの『ディスタンクシオン』以降に登場した「文化的雑食性」（オムニボア）に関する議論が取り入れられ、方法論上の差異化が図られている。ブルデューは、文化と階級の関係性について、文化資本の豊かな人々（上流階級）は「高級文化」を好む一方で、文化資本の少ない人々（労働者階級）は「大衆文化」を好むという形で捉えていた。例えば、『ディスタンクシオン』の例では、知識人階層がバッハの「平均律クラヴィーア曲集」を好むのに対して、大衆が毎年ウィーンフィルのニューイヤーコンサートのアンコールでもよく演奏され、広く知られているシュトラウスの「美しき青きドナウ」を好むといったようである¹⁵。

これに対して、「文化的雑食性」（cultural omnivore）の議論を展開したりチャード・ピーターソンは、学歴の高い人やコミュニティにおいてつながりのある人ほど、文化的に雑食（オムニボア）であり、「高級文化」と「大衆文化」の双方を好む一方で、そうでない人たちは「大衆文化」しか好まない（ユニボア）という議論を、主にアメリカでの調査結果にもとづきながら展開している（Peterson 1992; Peterson and Kern 1996 など）。こうしたアメリカ社会でのブルデュー理論の読解と応用は、アメリカ流の「計量社会学」の流れによる応用でもあった。すなわち、先述の「社

¹⁵ なお、『文化・階級・卓越化』のなかでは、ブルデューのこの議論について、いずれの例にせよ、クラシック音楽しか質問されていないことが批判されており（本書148頁）、他ジャンルの音楽を含んだ調査が行われている。

会的なものの関係論的組織化」という捉え方よりは、アメリカの計量社会学による因果関係モデルの分析の流れを汲む回帰分析がそこでは用いられている。

くり返しになるが、本書はこのような単純な因果関係を用いた回帰分析にすぐに進むのではなく、まず文化の好みの関係性をマップ(「文化マップ」)として分類し、図示することによって、文化への好みや参加と、その背景にある階層構造を多面的に捉えている¹⁶。もちろん、『文化・階級・卓越化』の議論では回帰分析を全否定している訳ではなく、いくつかの章では、その分析を出発点として回帰分析が用いられており、その結果、地位構造に関する新たな知見も示されている。

3.2 『ディスタンクシオン』の手法をイギリス社会に応用した際の改良点

『文化・階級・卓越化』で行われた調査では、『ディスタンクシオン』をイギリスに応用するため、おもに質問紙調査とインタビュー調査の手法において、さまざまな改良が加えられている。具体的には、1) フォーカス・グループインタビュー、2) エスニック・プースト・サンプル、3) 世帯インタビュー、4) エリートインタビューが導入されている。これらの方法は、先に示した三つの問いのうちの第三の問い、「地位を確立した中産階級諸集団が文化形態の組織化によって優位になる過程をどの程度まで捉えることができるか」という点と、「同様の過程がもろもろのジェンダーとエスニック集団の関係の秩序化と再生産においてもみられるか」(本書 34 頁)という問いを明らかにするためである。以下では改良された調査法の具体的な内容について、順に見ていこう。

第一に、第三の問いの後半部で言及されているジェンダーとエスニック

¹⁶ 紙幅の関係上、本稿では割愛したものの、『文化・階級・卓越化』にはこうした文化と社会集団(職業、性別、年齢、学歴等)の関係性を示した図(たとえば、図 3-1 から 3-8)が複数掲載されているので参照されたい。

集団に関する調査法から確認すると、本書の調査では、全国規模の無作為サンプルの1,564名に加えて、イギリスの「三大エスニック・マイノリティ集団」であるインド系、パキスタン系、アフロ・カリブ系が均等に含まれたエスニック・ブースト・サンプルの227名の合計1,791名が対象になっている。この質問紙設計に関しては、イギリスの国立社会調査センターの協力を得ており、2004年から2005年の冬から早春にかけての実査はこのセンターが担当した。このように本書の調査は、最新のサンプリングテクニックを用いているという点で、おもに1960年代中頃に実施されたブルデューの調査とは対照的である。

第二に、実際に質問紙を作成したり調査を実施したりする前に、大規模なフォーカス・グループインタビューが実施されている点も、上記の目的を達成する上で特筆すべきである。これは、人口構成が異なる層の文化実践とその様式の両方を詳しく調査することを目的とするものであり（本書、方法論補遺1参照）、職業階級やジェンダー、エスニシティ、年齢、セクシュアリティなどの異なる社会的地位の組み合わせに配慮してフォーカス・グループの対象者が集められている。

第三に、質問紙調査だけの知見からでは、文化に関する嗜好や実践の実態を精確に明らかにすることができないというブルデューの哲学を継承し、本書においても質問紙調査を実施した後、大規模な「世帯インタビュー調査」が実施されている。この世帯インタビューは質問紙調査のサンプルに加え、該当する場合はそのパートナーを対象としている（本書、方法論補遺3参照）。

第四に、経済的・政治的、または文化的に卓越した地位にある個人は無作為サンプルの対象になることが限られるという点を克服するため、ブルデューの例にならい、成功したビジネスマンやビジネスウーマン、政治家、

¹⁷ このように文化的に恵まれた地位の人を、意図的に多くサンプリングすることにより、より明瞭に関係性を提示する試みは日本でもしばしば行われている（例えば小針 2004）。

上級公務員と学者を対象にした「エリートインタビュー」も実施されている¹⁷（本書、方法論補遺4参照）。

4 『文化・階級・卓越化』における方法論——「混合研究法」の可能性

以上、第2節と第3節では、本書の理論上の分析枠組みについて概観した。こうした議論をうけ本節では、実際にどのような調査手法を選択するべきかについて、本書の「3章 イギリスの文化的趣味と関与のマッピング」と、「4章 文化マップのなかの諸個人」の内容に即して整理する。

訳者解説でも触れられているように、本書の方法論上の大きな特徴は「量的調査」と「質的調査」を組み合わせた「混合研究法」が採用されていることにある。こうした手法が採用されている理由は、ブルデューの研究姿勢、すなわち、量的調査によって社会構造の全体像が把握しようとしてきた一方で、質問紙調査の結果だけでは実践の実相を明らかにすることはできない、という哲学が受け継がれているからである。混合研究法では、「量的調査を先に行うべきか、質的調査を先に行うべきか」という方法論上の問題（メリット／デメリット）が指摘されており、この点をめぐってさまざまな議論が蓄積されてきた（抱井・成田編 2016）。

こうした方法論上の論争があるなか、『文化・階級・卓越化』では、基本的には量的調査を先に行い、具体的な実践の内容についてインタビューを行うという手順が取られている。その理由は、前節で紹介したように、量的調査によって因果モデルを構築することに一旦脇に置き、文化と階級の関係の関係論的組織化にまず関心が向けられているからである。では、このような考え方を操作化し実際に運用していく場合、どのような混合研究法が採用されるのだろうか。以下では詳細を見てみよう。

4.1 量的調査に関する方法論——「多重対応分析」とは何か

本書が社会のなかの関係を「関係論的組織化」の観点から分析するにあ

たり、最も重要な分析手法となっているのが、「多重対応分析」（Multiple Correspondence Analysis）である。近年、多重対応分析を単に入門レベルで導入するのではなく、実際に社会調査データの分析法として使用の上で参考となる文献が複数出版されている（例えば Clausen 1998=2015；君山 2011 など）。しかし、回帰モデルを中心とした分析に比べると、多重対応分析の知名度はまだまだ低いと言わざるをえない¹⁸。

ここで、あらためて「多重対応分析法」とは、いったいどんな調査手法と言えるだろうか。きわめて単純化して説明すれば、それはクロス表によって分類された値を単純なデータ行列に変換することにより、空間的（視覚的）に表現する方法である。この空間的表現では、近似しているものは近くに、似ていないものは離れて示される（Clausen 1998=2015：4）。このため、因果関係を前提とすることなく、社会のなかの連関の遠近関係を図示することができ、先述の「関係論的組織化」を実現するための手法として適している。

具体的に本書の表現を借りて説明すると、「このアプローチ（多重対応分析：筆者注）の魅力は、その帰納的な特徴によって主要な関係性がどのようなものなのかを前もって判断することなく、データから明らかになるパターンを解釈したり報告したりできることにある」（本書 91 頁）とされている。言いかえれば、「従来社会学で用いられてきた多変量解析の手法の主要な関心は、ある結果に対して『原因になる』いくつかの変数もつインパクトの大きさを測定すること」であるのに対して、多重対応分析における関心は、「嗜好の社会的規定要因に関する想定を暗に持ち込むことなく、文化的生活自体の様々な側面の組織化や互いの関係性だけにに基づいて構築される」（本書 91 頁）という点にある。

ところで本書では、多重対応分析を使用する際に「文化」なるものが、

¹⁸ ブルデューの議論をもとに、日本社会のデータについて多重対応分析を使用した先駆的な研究としては近藤（2011）を参照。

「関与」(行動の側面:する／しない。する場合はその頻度で数値化)と「嗜好」(好みの側面:好き／嫌いで数値化)という2つのカテゴリーと7つの界に体系的に整理されている。この7つの界とは、「音楽」、「読むこと」、「視覚芸術」、「テレビ」、「映画」、「スポーツ」、「外食」(食事)である。こうした分類を前提に多重対応分析が実施された結果、以下のような4つの「軸」が抽出されることになった。それら4軸とは、①頻繁に関与しているか／あまり関与していないか(関与／非関与)、②最近の流行のものか／古くから地位の確立したものか(現代的・商業的／地位が確立した)、③外向的か／内向的か、④関わりが熱心か／穏当かである。

こうした分析結果について特筆すべきは、上述した4つの軸のうち回答上の分散に関する説明力が最も高い第1軸(右側:関与が高い、左側:関与が低い)と、その次に高い第2軸(上方:現代的、下方:古典的)を交差して作成された図(本書図3-1)の結果、および、その図上に職業階級を追加して配置させた図(本書図3-9)の結果である。両者の図を重ね合わせてみると、「専門職＝幹部階級」と「中間階級」、「労働者階級」という三つの階級に属する諸個人の位置を比較した場合、第2軸上の分布についてはそれほど大きな差異(同心円上のずれ)がみられない一方で、第1軸上では大きな違いがみてとれる。すなわち、先に「文化的オムニボア」を論じた際に指摘したように、イギリス社会のなかで見出される社会的な分断線は、ブルデューが指摘するような「上流階級」(高尚な文化)と「庶民階級」(大衆文化)の間に存在するのではなく、代わって「文化的に活発であり幅広い活動に関与しているようにみえる人々」(たとえば専門職＝幹部階級)と「狭い範囲の文化的活動や関心しかもたない相対的に無関心な人々」(労働者階級)の間にみられる、ということが示されている(本書90頁、及び図3-1と図3-9を比較参照)。

こうした議論をふまえて本書の知見を整理すれば、多重対応分析を通じて得られた最大の発見とは、『ディスタンクシオン』において自明とされてきた、特定の文化と階級を一对一に対応づける単線的な解釈図式のあり

方が再考されるとともに、「中産階級」に対して「中間階級」概念が提示されたり、階級上位層を表す概念として「専門職＝幹部階級」（professional executive class）が提案されたりしているように、従来の階級観が再定義されている点だと考えられる。

4.2 質的調査を導入する意義——量的調査との「相補性」

4.2.1 質的調査導入の利点

以上の特徴をもつ多重対応分析から得られた結果は、質的調査（インタビュー調査）の結果と関連づけられ検証されることになる。くり返すと、このように「量的調査」と「質的調査」を相互補完的に活用する手法のことを、社会科学の領域では「混合研究法」（mixed method）と呼ぶが（抱井・成田編 2016）、通常とは異なり、こうした複雑な手法が採用される理由とは何だろうか。

本書では、混合研究法としてのアプローチには三つの重要な利点があるとされている（本書 115-116 頁）。第一の利点は、質問紙調査と質的インタビューで同じ個人についてデータを比較することで得られるものである。すなわち、質問紙調査の回答者がインタビューをされた際に、質問紙調査で回答していた知見をどれだけ変更し、修正しているかを評価することができる。その結果として、「質問紙調査の測定結果には誤差がある」という一般論にとどまる認識を乗り越え、そのような「誤差」の社会文化的な意味を同定することができるようになる。

第二に、質的インタビューを併用することにより、多重対応分析で得られた結果の意味を精確に評価することができる。たとえば、複数の個人がライフスタイルの空間上で似たような場所に位置づけられているにもかかわらず、その発言が根本的に異なっていると。その場合、当初実施された文化の活動や嗜好に関するマッピング（文化マップ）の信頼性自体が失われることになる。したがって、マップ上、互いに近い位置にいる者同士の発言を吟味することで、抽出された異なる個人間の相違点と類似点を

きちんと評価することができる。

第三に、質的インタビューから得られる情報のおかげで、軸それ自体の意味をより精確に解釈することができる。

このように、本書では「われわれのアプローチが意味するのは、量的なデータと質的なデータとはその体系からして相補的なもの」(本書 115 頁) だという問題関心のもと、対応分析という調査手法の独自性、すなわち図示された社会空間上に個人を配置させることができるという特徴が活用される形で、混合研究法が採用され実施されている。

4.2.2 質的調査の導入例——対照的な 2 名のインタビュー事例から

しかし、一般的にはこうした利点が認められる対応分析ではあるが、実際に本書の文脈においてはどのような成果が得られているのだろうか。

4.1 でみたように、多重対応分析の結果、とくに第 1 軸（右側：関与が高い、左側：関与が低い）と第 2 軸（上方：現代的、下方：古典的）の結果だけを見た場合、第 1 軸の左側に位置する人たちは、「まったく社会的な活動を実施していない状態」、すなわち「社会的に排除」(本書 116 頁) された状態であるように見える。しかし、こうした認識は果たして正しいのだろうか。このような問題関心のもと、本書の第 4 章では第 1 軸の左側に観察される「文化的な活動を頻繁に実施しない人たち」を対象にインタビューを実施することで、質問紙調査のなかでは明らかにならなかった事実について光が当てられている。

第一に、第 1 軸の最も左側にいる個人に対するインタビュー調査の結果(本書 117-120 頁) を取りあげてみよう。「障害者介護施設」で働くマーガレット・ステイブルズは、「誕生日や特別な用事」で出かける場合ののぞけば、これまで文化施設と呼べる場所にはほとんど出かけたことがない。また、年に 5 冊しか本を読まず、モダンジャズを除きほとんど音楽は聞かない。加えて、彼女は芸術については視覚芸術に関してはほとんど知識がなく、映画についてもイングマール・ベイルマンやペドロ・アルモドバルと

いった映画監督の名前を知らない。

しかし、彼女に対するインタビューの結果からは、質問紙調査では集められなかったような活動として、「家庭」（家事・育児）と「近所づきあい」を中心とした「余暇活動」の実態が明らかになった。たとえば、彼女は、インタビュー中に息子であるビリーの名前を出しながら、自らの子育てに関する忙しさについて下記のように、実に雄弁に語っている。

いえいえ、私は家にいる必要があるんです。わかってもらえると思いますが…。ビリーは病気で学校をずっと休んでいたせいで、今日、四冊の本を宿題で持って帰ってきたんです。それを明日までに全部やらないといけないんです。つまりまあ、いやってうーんやらないといけないことがあるわけで。ビリーと私でやるのに、二時間半はかかるでしょうね。きっちりやるには（……）（本書 119 頁）。

このように、子育てに忙しいマーガレットにとっては、こうした日常的な忙しさが解放されるための時間として、「余暇活動」が重要な意味をもつことになる。彼女にとっての余暇とは「自宅を中心としたもの」である。より具体的には、「日曜日になると決まって家族で散歩に出かけ、教会に通って」おり、友人たちと「家族ぐるみ」で交際していて、主に「自宅」で楽しんでいる。ここからわかるのは、子育てと余暇活動に関する「無数とも言えるべき社会関係」（本書 119 頁）によって時間をとられているがゆえに、文化的な活動が実施できないということである。

第二に、マーガレットの事例と対照的に、第 1 軸の最も右側、すなわち文化的活動に積極的に関与しているマリア・デレックの事例（本書 121-123 頁）をとりあげてみよう。質問紙調査に対する彼女の回答からは、彼女がテレビをまったく見ないものの、スピルバーグやヒッチコックの監督映画は見たりしていることが明らかになっていた。また、「読書好き」という彼女が昨年読んだ冊数は 500 冊であり、その範囲は推理小説から

SF、伝記、自己啓発本や宗教書にまで及んでいる。さらに、彼女はジャズ、ロック、クラシック、そしてヘビーメタルの熱狂的なファンであるとともに、彼女は視覚芸術にも熱心でファン・ゴッホとパブロ・ピカソが好きである。このように、「ポピュラー・カルチャー」から「ハイ・カルチャー」にまでわたるマリアの雑食で貧欲な嗜好がはっきりと裏づけられる。

しかし、マーガレットに対するインタビュー調査から明らかになったのは、彼女は「筋痛性脳脊髄炎」という重い障害があり、日常的には車いすがないと移動できないという状況であった。そのため、彼女は人と会ったり、レジャー施設に出かけたりする機会はほとんどないにもかかわらず、他方で「インターネット」を介して実に生き生きと、様々な文化的な活動にはまり込んでいた。

マリア：パソコンこそがすべてで、パソコン上で生きているのです。

インタビュアー：そのことについて、どう思いますか？

マリア：私はインターネットをするのが好きです。パソコンでゲームをするのが好きなんですね。

インタビュアー：どんな種類のサイトを見たり、どんなゲームをしたりしていますか？

マリア：私は女性特有の問題のせいで、支援団体にずっと頼り続けてきました。でも、まあ、ブロード・バンドにしてからは、パソコンを一台、つけっぱなしにしたままにしています。うちには二台パソコンがあるんですが、私のものとフルーツバットのなんです。裏でちょうど鼻歌が聞こえるでしょ……。あれはフルーツバットの鼻歌です。で、彼はパソコン・マニアなんですね……。私たちはいつもパソコンを一台、つけっぱなしにしていって、もし何かをしたり、何か会話のなかで生じたとするでしょ。「あれ、その答えは何かしら。あれ、私は何を知りたかったんだったつけ。あるいは、もしかしたらこ

うかもしれないといったことを、私たちはインターネットで検索するんです。だから、インターネットというのは驚くほどたくさんのことに使える、参照ツールなんです。オンライン上のゲームについても同じことで、それを使って、フルーツバットと私は出会ったわけで……（本書 122 頁）。

このように、第 1 軸の左側に観察される「文化的な活動を頻繁に実施しない人たち」に対してインタビューを実施することで、彼・彼女たちが質問紙調査のなかには含まれていなかった活動や社会的ネットワークに関与していることが明らかになり、その結果、第 1 軸に関する理解を「精緻化」することができる（本書 116 頁）。以上のような検証作業の結果、第 4 章では多重対応分析（量的調査）とインタビュー結果（質的調査）を相補的に組み合わせることで、文化と社会的不平等というブルデューにより問題提起された研究テーマを多角的に検証することができる、と結論づけられている。

5 結語——『文化・階級・卓越化』の検証と応用に向けて

以上、本稿では、ピエール・ブルデューの研究蓄積を現代イギリスで応用した文化と社会的不平等の関係性に関する重要文献であり、筆者たち（森田・相澤）がその翻訳作業に関わった、『文化・階級・卓越化』の内容について解題を行ってきた。その際、本書の内容が研究者に限らず、それ以外の一般読者や学部生にとっても理解しやすくなるように、本書の理論と方法に関わる第 1 部と第 2 部に焦点を当てて解説した。

その要点をまとめると、1) 文化（嗜好と実践）と社会的不平等の関係性を「関係論的組織化」（relational organization）という独自の観点から分析している点（理論上の独自性）、2) そうした関係論的視点のもと、「量的調査法」の一つで、特定の因果関係を前提とせずに変数間の関係性の全体をマッピングできる「多重対応分析」（Multiple Correspondence

Analysis)と、「質的インタビュー」(フォーカス・グループインタビュー、世帯インタビュー、エリートインタビュー)を総合的に関連づけた「混合研究法」を実施している点(方法論上の独自性)、という2点に整理されるだろう。

ただし、上記以外にも『文化・階級・卓越化』についてはブルデューの社会調査法のポテンシャルを正確に理解し、応用していくためのアイデアが数多く説明されている。たとえば、紙幅の関係上、本稿ではふれることができなかった論点としては、ジェンダー(第12章)やエスニシティ(第13章)といったブルデューの研究では軽視されがちであった視点の重要性や、「中産階級」概念の再定義(10章)というテーマ設定の可能性がある。このように、今回扱えなかった論点については、別稿にて議論することにした。

最後にブルデューによる社会調査の方法を日本で応用していく際の叩き台としては、きわめて実験的な試みではあるが、すでにパイロット調査が実施されているため(相澤・森田 2016)、今後は本書の知見を日本社会に応用した社会学的研究が蓄積されていくことが期待される。たとえば、一例として相澤・森田が東海圏の大学生を対象に実施した調査票には、Twitter、Facebook、Instagramの3種類の利用実態を尋ねた質問があり、この質問を使えば、「誰がTwitterを使うのか」といったテーマで卒業論文を作成することが可能である。本稿の知見をとおして、われわれの身の回りにある「文化」と「社会的背景」(社会的不平等)の関係性を「調査」したいと思う読者が、少しでも増えれば望外の喜びである。

[文献]

Aizawa, Shinichi, and Iso, Naoki, 2016 “The Principle of Differentiation in Japanese Society and International Knowledge Transfer between Bourdieu and Japan”, Derek Robbins (ed.) *The Anthem Companion to Pierre Bourdieu*, London: Anthem Press, 179–200.

- 相澤真一・森田次朗, 2016, 「社会調査データによる日本の社会的分断線の構成要素に関する探索的検討——東海圏の大学生調査の基礎集計から」『中京大学現代社会学部紀要』10（1）：169-188.
- 秋永雄一, 1992, 「階級と文化」, 柴野昌山・竹内洋・菊池城司編『教育社会学』有斐閣 143-163.
- Baudrillard, Jean, 1970, *La société de consommation : ses mythes, ses structures*, Paris : Gallimard. (= 1979, 今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造』紀伊国屋書店.)
- Bennett, Tonny, et al., 2009, *Culture, Class, Distinction*, London : Routledge. (= 2017, 磯直樹・香川めい・森田次朗・知念渉・相澤真一訳『文化・階級・卓越化』青弓社.)
- Bourdieu et J.-C. Passeron, 1964, *Les heritiers*, Paris : Éditions de Minuit. (= 1997, 石井洋二郎監訳『遺産相続者たち——学生と文化』藤原書店.
- , Pierre et Darbel, Alain 1966, *L'Amour de l'art : les musées et leur public*, Paris : Éditions de Minuit. (= 1994, 山下雅之訳『美術愛好——ヨーロッパの美術館と観衆』木鐸社.
- et J.-C. Passeron, 1970, *La reproduction, Paris : Éditions de Minuit*. (= 1991, 宮島喬訳『再生産——教育・社会・文化』藤原書店.
- , 1977 *Algérie 60 : Structures économiques et structures temporelles*, Paris : Éditions de Minuit. (= 1993, 原山哲訳『資本主義のハビトゥス——アルジェリアの矛盾』, 藤原書店.)
- , 1979, *La distinction, Critique sociale du jugement*, Paris : Éditions de Minuit. (= 1984, Tralslated by Richard Nice, *Distinction : A Social Critique of the Judgement of Tasete*, London : Routledge. (= 1990, 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン I・II——社会的判断力批判』藤原書店.)
- 1980. *Le sens pratique*, Paris : Éditions de Minuit. (= 1988-1990, 今村仁司他訳『実践感覚』(一・二巻) みすず書房.)
- , 1992, *Les règles de l'art*, Paris : Éditions du Seuil. (= 1995-1995, 石

井洋二郎訳『芸術の規則Ⅰ』『芸術の規則Ⅱ』, 藤原書店.)

——— & Loïc J. D. Wacquant. 1992, *An Invitation to Reflexive Sociology*, Chicago: University of Chicago Press. (=2007, 水島和則訳『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待——ブルデュー、社会学を語る』藤原書店.)

Centre for Research on Socio-Cultural Change, 2017, “About us”, ([http : // www.cresc.ac.uk/about-the-centre/](http://www.cresc.ac.uk/about-the-centre/)、2017年8月29日取得.)

Clausen, Sten Erik, 1998, *Applied Correspondence Analysis : An Introduction*, SAGE. (=2015, 藤本一男訳『対応分析入門——原理から応用まで』オーム社.)

Grenfell, Michael ed. , 2012, *Pierre Bourdieu : Key Concepts 2nd edition*, Durham: Acumen.

平野ノラ, 2017, 「平野ノラオフィシャルブログ「平野ノラのOKパブリー！ブログ」Powered by Ameba」(<https://ameblo.jp/hiranonora/>、2017年8月30日アクセス)

抱井尚子・成田慶一編, 2016, 『混合研究法への誘い——質的・量的研究を統合する新しい実践研究アプローチ』(日本混合研究法学会監修) 遠見書房.

君山佳良, 2011, 『第2版 コレスポネンデンス分析の利用法——一般対応分析モデル』データ分析研究所.

小針誠, 2004, 「階層問題としての小学校受験志向——家族の経済的・人口的・文化的背景に注目して」『教育学研究』71 (4) : 422-434.

近藤博之, 2011, 「社会空間の構造と相同性仮説——日本のデータによるブルデュー理論の検証」『理論と方法』26 (1) : 161-177.

森田次朗・相澤真一, 2015, 「P・ブルデューにおける社会調査法の応用可能性——『文化・階級・卓越化』の翻訳作業をとおして」『中京大学現代社会学部紀要』9 (2), 161-188.

Peterson, Richard, 1992, “Understanding Audience Segmentation: From Elite and Mass Omnivore and Univore,” *Poetics*, 21 (4) : 243-258.

——— and R. M. Kern. 1996. “Changing Highbrow Taste : From Snob to Omnivore,” *American Sociological Review*, 61 : 900-7.

Savage, Mike, 2015, *Social Class in the 21st Century*, London: Penguin Books.

高根正昭, 1979, 『創造の方法学』講談社.

渡辺和博, 1984, 『金魂巻——現代人気職業三十一の金持ビンボー人の表層と力と構造』主婦の友社.

【付記】

本稿は、2016 年度中京大学特定研究助成「現代日本社会における差異化原理を解明するための社会調査モジュールの開発と応用」(研究代表者：森田次朗、研究連携者：相澤真一)の成果の一部である。本稿の執筆は、相澤が全体の構想と草稿を作成し、その後、森田による全体にわたる大幅な加筆を経た後、双方で内容を確認した。なお、本論文の執筆に当たっては、高田佳輔氏と堀兼大朗氏(ともに中京大学)、越田有咲氏(名古屋大学大学院生)、由井智也氏(中京大学現代社会学部学生)のご協力を賜った。記して感謝の意を申し上げたい。最後に、本稿に関する文責は筆者たち(森田・相澤)にある。